

「直接格」の「に」と「間接格」 の「と」について

劉 素 英

本論は「水が氷に／となる」「その結果を当然のことに／と考える」のような表現に使用される「こ」と「と」を取り上げ、他の格助詞に見られない構文上、意味上の特徴、また「に」と「と」の間に見られる構文的・意味的な違い及びその背後に潜んでいる発想の特殊性などについて考察することにする。叙述を明確にするために、上例に挙げる「に」と「と」をそれぞれ「直接格」と「間接格」と仮称し、他の用法を表す格助詞の「に」と「と」を「補語格」と呼ぶことにする。

本論は第一章「に」と「と」の共通点、第二章「に」と「と」の相違点の二章に分けて考察していきたいと思う。

第一章 「に」と「と」の共通点

一、構文上の特徴

形式上から見ると、この「に」と「と」の後ろに一般的に「なる」「する」のような実質意味に欠け、抽象的意味を表す動詞か、或いは抽象的動詞と言わなくても、「思う」「考える」「見える」など、その行為の内容或いは対象物などが欠けては表現の意味が不完全になってくるというような動詞が後続するのが普通である。例えば、

- 頭を使わない人は五十代でも頭がぼけてしまい、「恍惚の人」となってしま
う。(子)
- 彼の挙動が津田を変な気持にした。(明)
- 強い人に見えますか。(心)
- 人々は私を狂人と見なした。(野)

後続する動詞が以上の特徴があるから、上例における「『恍惚の人』と」、「変な気持に」「強い人に」「狂人と」は述語動詞を修飾する補語であるに違いないが、付加的な成分ではなく、文の成立にとって不可欠な成分である、と見なければならぬ。これは以下の特徴によって裏付けられる。

×人々は狂人と私を見なした。

×狂人と人々は私を見なした。

×私を狂人と人々は見なした。

○彼の挙動が津田を変な気持にした（直接格）

×彼の挙動が変な気持に津田をした。

×変な気持に彼の挙動が津田をした。

×津田を変な気持に彼の挙動がした。

上例のように、この「～に／と」の場合、語順が変わると、文が不自然になるか、或いは意味が変わってしまうのである。

以上のように、この「に」と「と」は名詞に伴なって、他の言葉との係わり合いを示しながら、述語動詞と密接に結合して述部を成していると考えられる。したがって、この「に」と「と」に陳述性が潜んでいることが認められるようである。これも他の格助詞、また、「補語格」の「に」「と」と違う特徴の一つである。松下大三郎は「なり」「たり」などは「に」や「と」に形式動詞「あり」が下接した「にあり」「とあり」の約音であると説いて、現代語においては、この「に」と「と」の二つと、「に」の転活用である「な」「だ」「です」の三つの計五つを断定の動助辞とするのである。松下では、動助辞であることの条件は活用があることであるが、「に」「と」には活用がないのではなく、第二活段（連用形）があるだけで他の活段が欠けているのだと説明されている。『現代助動詞の史的研究』の中では、「と」の性格を論じ、「格助詞『と』のうちで、指定的陳述の意の濃いものを『だ』、『である』に準じて指定の助動詞「と」として取り出すことができる」とし、「に」を助動詞「だ」の連用形としている。従来のもそれに関する論説がいろいろあるが、この「に」と「と」に陳述性があることが一般的に認められているようである。

二、意味上の特徴

「水が氷に／となる」のような用法について、ほとんどの辞書に載っているが、「そのことを当然のことに／と考える」のような用法についての説明はまだ少ないようである。比較的詳しく書かれているのは『大辞林』だと思う。

『大辞林』におけるこの「に」と「と」への説明を比べて見ると、「に」と「と」

は似たような意味用法を持っていることが再確認できる。

「に」

「と」

⑨変化する結果を表す……………③動作・作用などの帰結・結果を表す。

⑩動作・状態の行われ方・あり方を表す……④動作・状態の様子を表す。

⑪状態を認定するのに用いる……………⑤動作・作用・状態の内容を表す。

さらに、辞書の説明と用例を見ると、両者それぞれの三つの項目は意味的には互いにまたがっていて、その境目がはっきり分けられていないように思われる。実際、「に」と「と」は以上のように分類できる場合とできない場合があるのである。したがって、すでに「名詞+に／と」と見られない(例えば副詞など)のを除いて、ほかのをひっくるめて、「結果」(変化結果と「認識」結果)を表わすものと見たほうが適当ではないかと思う。

以上「に」と「と」の構文上、意味上などの共通の特徴について、用例または辞書の説明を見ながら考察してきた。次の章で両者の相違点について考えることにする。

第二章 「に」と「と」の相違点

この「に」と「と」は、

○水が氷に／となる。

○その結果を当然のことに／と考える。

のように、同じ文の中に「に」も「と」も両方用いられることが可能な場合があるに対し、

○私はそれを恨みにに思いません(断)

○眼前にひろがる海空の戦闘状態を一望する「眼」となる場所である(滄)

のように、「に」と「と」のどちらしか用いられない場合もある。また、両方可能であっても意味の違いがあるので、前後関係によって置き替えられない場合もある。その違いは主に意味上の違いとその背後に潜んでいる発想の特殊性によるものだと思う。それについて変化動詞が続く場合と認識動詞が続く場合を通して考えてみることにする。

一、変化動詞が続く場合の「に」と「と」

ここで「なる」を中心にして、「～になる」と「～となる」のそれぞれの特徴を考えていきたいと思う。

まず次の用例を比較してみよう。

A、a コンクリがすんで、終業時間になった。(滄)

b 一日一日は、かけがえのない大切な時間となった。(滄)

B、a 未亡人になった時、わずか二十歳、子供はなかった。(滄)

b 千代子は人生で二度戦争未亡人となり、父を知らないもう一人の子を生むころであった。(滄)

同じ「時間」「未亡人」への変化を表わしているが、aは変化の結果を客観事実の帰着する「方向」か自然到来の「帰着点」として表す。それに対して、bのほうは「……(という)時間」「……(という)未亡人」のように、いずれも特別な意味合いが含まれている。つまり「と」を用いることによってその変化の結果を主観的にとらえて、それを指定して表すのである。次の用例からもその違いが見られる。

○竜子はからになったグラスにウイスキーをごぼごぼと注いだ。(大)

○祥子の顔はみるみる紫色になった。(駱)

○アメリカ人にとってもすでに第二次世界大戦は遠い過去となった。(滄)

○この正月は丈市とB夫婦にとって結婚してはじめての迎春であり、そして、最後の正月となるものであった。(滄)

「～になる」は客観的に事実をとらえ、その変化の結果状態を自然の成り行きとして扱い、事柄をありのまま述べる。それとは逆に、「～となる」は客観的現象を主観的な認識、感情、評価などを加えた上での指定内容として表す。「に」は副詞語尾の「に」と意味が近いので状態性が強いがゆえ、自然のまま、物事本来の状態の時は「に」がふさわしく、「と」は引用の「と」と本来関係があるものであるから、結果内容指定の場合は「と」が適当だと思われる。

「～になる」と「～となる」はこのような違いがあるので、実際の使用上、次のような幾つかの特徴が見られる。

1. 「～となる」は結果の内容を指定して表わすので、変化の結果内容を重点的

に捕らえて、その結果の内容によって生じた資格、立場、名目などを強調することになる。例えば、

A、 a 兄と妹は捕虜になったあと、宜野座で栄養失調で死んだ。(滄)

b 捕虜となって行動の自由はない。(滄)

aは「捕虜になった」後、どういうことが起こったか、というように時間のきっかけとして述べているのに対して、bは「捕虜」となったことによって「捕虜」という身分を持つ人間となり、それが原因で「行動の自由はない」ということを強調している。「～となる」は資格強調・認定の表現であるゆえ、「～になる」よりも「～となる」のほうは抽象的概念を表すのが多い。また、「～となる」の前に連体修飾語が長くなる時がある。例えば、

- 眼前にひろがる海空の戦闘状態を一望する「眼」となる場所である。(滄)
- 頭を使わない人は五十代でも頭がぼけてしまい、「恍惚の人」となってしまう。(子)
- つまり、今日の大学生の多くは考えることがまったく苦手で、肉体は成長しても、自分でものを考える能力の乏しい人間、だれかのいうことを受け売りすることしかできない、幼稚な人間となっているのである。(子)
- その結果、アメリカの各地から送り届けられた「情報」はアメリカ社会での新聞のあり方、その土地の人と歴史に密着している地方紙の性格、さらにアメリカ人気質をもつぶさに示すものとなった。(滄)

2.「～になる」は変化の結果を自然の成り行きとして表し、事柄をありのまま述べるので「～になる」は徐々の変化状態を表す場合にも、急激な変化を表す場合にも用いられる。それに対して、「～となる」はあまり変化の状態・過程を重点的に捕らえていないので、瞬間的・突如の変化・急激な転化を表わす場合にしか用いられない。例えば、

- 二人は運ばれてきたアイス・コーヒーとシャーベットを前に少しずつくだけた口調になってゆきながら話し続けた。(大)
- ……だんだん妙な気持になって、電話を切るとがっくり疲れた。(戦)
- 浮かぬ顔をわざとほてらして居たのだが、急に陽気になった。(?)
- ……の誘爆と延焼によって見るまに火焰は全艦にひろがり、飛行甲板と

艦橋附近は火の海となった。(滄)

○操舵室にいたトルー艦長は机でみぞおちを強く打ち、瞬間的に呼吸困難と
言語不能の状態となった。(滄)

○(飛行機が)ガクッと角度を変えて、火の塊となって落ちてゆく。(滄)
「と」は変化結果を主観的に捕らえ、主観意識、感情的なものを加えて述べるので、事実のままでも、大げさな表現で指定・認定・想定を表してもかまわないのである。上例の「火の海」「火の塊」はみな客観的事実を越えた表現であるので、「に」に置きかえにくいようである。

以上「～になる」と「～となる」の使い分けについて考えてきたが、両者の基本的な違いをまとめてみると、「～になる」は客観的状态の変化の結果を自然な成り行きとして捕えているのに対して、「～となる」は客観的状态の変化結果を主観的な指定の結果として捕らえているのである。

二、認識動詞が続く場合の「に」と「と」

認識動詞は認識主体が対象に対してなんらかの属性を認めるという内容の事象を表わす動詞である。『命題の文法』では、認識動詞を「主体性認識動詞」(思う、考える、見る、認める、感じる、判断する、みなすなど)、と「自発性認識動詞」(思われる、思える、見える、聞こえる、感じられるなど)という二種類に分類している。次にこの分類にしたがって、「に」と「と」の違いを考えていきたいと思う。

1. 「主体性認識動詞」が続く場合

まず「と」の用例を挙げる

- ① 私にとって別に縁起の悪いものではない、ただ安原薬局主人がそれを思い出したとすれば、何と思ふか疑問が浮かぶだけである。(か)
- ② それから今まで受験勉強でだいぶ無理が続いたことと存じます。(例)
- ③ 人々は私を狂人と見なした。(野)
- ④ 一年後に戦死と認定されたものなのか、……(滄)
- ⑤ 女はいよいよわたしをアパートずまいのひとり者と推定したのであった。
(溼)
- ⑥ 私は家庭を一つの会社と考えています。(朝)

次に「に」の用例を挙げよう。

① その上わざわざこの手紙まで頂きまして、なんとも恐縮の至りに存じます。

(例)

② 私はそれを恨みに思いません。(駈)

③ 中国人がこのことを誇りに思うなら……(？)

④ 留学生は日本語がよくできないから、日本人は負担に感じる(朝)

⑤ 昔から疑問に思ってきたことや最近になってますますわからなくなってきたことなんかを……(大)

⑥ ぼくを結婚相手に考えたとしても、(愛)

以上の用例を比べてみるとわかるように、「と」のほうは判断性の強い表現であり、認識主体の積極的、能動的推論、判断の行為を表す。それに対して、「に」のほうは判断ではなく、副詞的に後続する動詞を修飾しながら、認識の状態・結果となる帰結点、帰着点を示すか、或いは単なる位置づけを表す。「に」の①～④は気持、感情がどこまで行っているかを示し、⑤⑥は「思ってきた」「考えた」の存続状態の位置を示している。

「主体認識動詞」が続く場合、「と」による構文は認識主体の判断性・意志性が高いので、動詞は主体の意志を表す表現を取ることができる。

○ 将軍を日本の元首と認めよう。

○ このアクシデントをよい兆しと受けとめよう。

2. 「自発性認識動詞」が続く場合

この場合も1と同じように「と」による表現は主観判断性が強いようである。

例えば、

○ 甲種合格による徴兵とあるから、昭和十二年一月に海兵団へ入団したものと思われる。(滄)

○ いくらカトリックの信者であっても、憎むだけの感情しか持てない相手であったなら、帰るところがなくとも、身のふり方はあったと思える。(滄)

上の二つの例文はいずれも前の文に根拠となるような内容があり、それを認めるとその当然の帰結として可能となるという意を表している。したがって、判断力の要る主観的表現である。次の用例は根拠となる内容は後の文にある。

○だれかが写真を撮っていると見え、フラッシュが弾ける。(闇)

○風も静まったと見えて、外はひっそりとしている。(郎)

だから、動詞の「自発」よりも「可能」の意味が強いようである。次に「に」の用例を見る。

○初めは間の抜けたような感じだった。そのうちどことなくのんびりした雰囲気でよいものに思えてきた。(雲)

○かな子も満佐子も第一と第二の橋を無事に渡ったという安堵と一緒に、いままでさほど思っていなかった願事がこの世でかけがえのないほど大切なものに思われ出した。(橋)

のように「どことなく」、自然にある気分になったことを表していて、自発性の高い表現である。次の例もそうである。

○私は稲城と稲毛を聞き間違えて、京葉道路をぶっ飛ばし、千葉の稲毛へ行ってしまった。……(ぎ)の発言が(げ)に聞こえたのだ。(タ)

○君、私は君の眼にどう映りますか、強い人に見えますか、弱い人に見えますか。(心)

上の用例はすべて、認識主体の意思にかかわりなく、視覚や聴覚などの感覚を通してひとりではなんらかの認識が得られる、という事象を述べる表現である。認識動詞が続く場合の「に」と「と」の特徴をまとめていうと次のことだと思う。「に」のほうは感覚・感情をそのまま描き、自発性・客観性の高い表現であり、後に続く動詞は「主体性」であろうと、「自発性」であろうと、自発的な事象を表す。それに対して、「と」のほうは主観判断の強い表現であり、「と」の前に受ける内容はそういうことだという指定判断をするので、後に続く動詞は「主体性」であろうと、「自発性」であろうと、主体認識・主体意志の強い表現である。

以上、変化動詞と認識動詞を通して、「に」と「と」の特徴を考察してきた。変化動詞においても認識動詞においても、「に」の共通な特徴は、事柄を自然の成り行きとして捕らえ、その自然変化の帰着点や自然に現われた心理状態・感覚状態をそのまま、直接に表現するということだと考えられる。「と」の共通な特徴は、事柄を単に取り上げるのではなく、その事柄を主観的意識・評価などを加

えた上での指定の結果として、或いは推論した上での判断の結果として表すということである。つまり、「に」の客観状態を直接に表現するのに対して、「と」は客観状態を間接的に話し手の意識内容として表す。「に」と「と」は結果（変化結果と「認識、結果」）を表わすことに共通しているが、「に」は直接で、「と」は間接的である故に、「に」を「直接的結果」と、「と」を「間接的結果」と呼んでも差し支えないと思われる。

〔用例の出典〕

- （明）『明暗』夏目漱石
- （心）『こころ』夏目漱石
- （子）『子育ての脳生理学』高木貞敬
- （野）『野火』大岡昇平
- （駢）『駢け込み訴へ』太宰治
- （滄）『滄海よ眠れ』澤地久枝
- （大）『大人の時間』五木寛之
- （駱）『駱駝の祥子』竹中伸訳
- （戦）『戦後短編小説傑作集』編集 野間宏等
- （か）『かきつばた』井伏鱒二
- （例）『例解文章ハンドブック』和雄児仁
- （溼）『溼東綺譚』永井荷風
- （朝）『朝日新聞』
- （愛）『愛情の系譜』円地文子

〔参考文献〕

- 大辞林／松村明編（三省堂）
- 日本語のシンタクスと意味／寺村秀夫著（くろしお出版）
- 生成日本文法論／奥津敬一郎（大修館書店）
- 命題の文法／益岡隆志著（くろしお出版）
- 日本語・連語論（資料編）／言語学研究会（むぎ書房）

国語助詞の研究／此島正年（桜楓社）

国語助動詞の研究／此島正年（桜楓社）

日本語助動詞の研究／北原保雄（大修館書店）

現代語助動詞の史的研究／吉田金彦（明治書院）